

吉見静江—その言説を追うための研究ノート・その1

A Study Analyzing Shizue Yoshimi's Discourses Part 1: Focusing on Her Studies and Practice before the War

大 高 真紀子* 定 行 まり子**
Makiko OHTAKA Mariko SADAYUKI

要 約 吉見静江は、1919年に日本女子大学英文学科を卒業、英語教師としての数年を経たのち、外国人宣教師の日本語教師となるが、これを契機に興望館から派遣されるかたちで、1927年に渡米。ニューヨーク社会事業大学で社会事業とその経営法について学ぶ。帰国後は興望館館長、戦後は厚生省児童局保育課の初代課長となり、児童福祉事業の諸問題について責任ある任務を遂行した。本研究では、吉見静江の戦前の歩みについて、吉見がかつて学んだ日本女子大学、ニューヨーク社会事業学校における研鑽、グリニッジハウスでの見聞、および興望館における実践から考察を行った。日本女子大学では吉見在学中に社会事業学科が開設されている。吉見は英文学科出身ではあるが、社会事業の大切さ、モンテッソーリ教育などを何らかのかたちで理解していたと推察できた。また、吉見の在学中は一貫して成瀬仁蔵が校長であったことを考えると、成瀬仁蔵の告別講演、および教育三綱領からは、大きな衝撃を受けたのではないかと思われた。留学先のニューヨーク社会事業学校および実習先のグリニッジハウスからは、その後の興望館における実践に結びつく様々な活動の知見を得ていたことが確認された。今後は、本研究の後編において、戦後に著された吉見静江の言説、および社会活動の分析により、吉見静江の児童福祉等についての論考を考察し、理解を深めていく予定である。

キーワード：吉見静江、日本女子大学、ニューヨーク社会事業学校、グリニッジハウス、興望館

Abstract Shizue Yoshimi graduated from the Department of English at Japan Women's University in 1919. After several years as an English teacher, she became a Japanese teacher for foreign missionaries, and she was dispatched by the Kobokan to the United States in 1927. She studied social work and law on its administration at the New York College of Social Work. After returning to Japan, she became the director of the Kobokan. After the War, she became the first director of the Childcare Division of the Children's Bureau of the Ministry of Health and Welfare, and she was tasked with addressing various issues related to child welfare services. This paper examines Shizue Yoshimi's prewar history from her studies at Japan Women's University, the New York School of Social Work, her observations at Greenwich House, and her practice at the Kobokan. The Department of Social Work was established at Japan Women's University while Yoshimi was a student, and although Yoshimi graduated from the Department of English Literature, she presumably somewhat understood the importance of social work and a Montessori education. Given that Jinzo Naruse was the director throughout Yoshimi's time at the University, she may have been greatly influenced by Naruse's farewell lecture and the Three Principles. Research confirmed that she acquired knowledge of various activities from the New York School of Social Work, where she studied, and Greenwich House, where she practiced, that later led to her practice at the Kobokan. In the second part of this study, we plan to examine and better understand Yoshimi's ideas on child welfare by analyzing her discourses after the war.

* 学術研究員
Research Fellow

** 住居学科
Department of Housing and Architecture

Key words : Shizue Yoshimi, Japan Women's University, New York School of Social Work, Greenwich House, Kobokan

1. 研究の目的

吉見静江は1915年に日本女子大学付属高等女学校、1919年に日本女子大学英文学科を卒業する。英語教師としての数年を経たのち、外国人宣教師の日本語教師となるが、これを契機に興望館から派遣されるかたちで、1927(昭和2)年渡米し、ニューヨークのスクール・オブ・ソーシャルワーク(後のコロンビア大学社会福祉学科)において社会事業とその経営法について学ぶ。帰国後は興望館セツルメントの館長、終戦直後には当時の厚生省児童局・保育課初代課長となり、児童福祉法制定時には児童福祉施設最低基準などに深く係わりとともに、戦災・引き揚げ孤児対策についても、孤児援護中央委員として尽力し、児童福祉事業の諸問題について責任ある任務を遂行した。

本研究は、吉見静江の歩みを概観するとともに、その言説を追い、吉見静江が何を考え、何を大切に、どのようなビジョンをもち、様々な実践をおこなってきたのか、考察を深めることを目的とする。吉見の著作等はそのほとんどが戦後に発表されているが、本稿では、吉見静江の言説をかたちづくる源泉はどのようなものであったのか、戦前における吉見の歩みを分析し、その概要を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法と既往研究

主として関連文献調査による。吉見静江についての既往研究には、田澤薫による一連の研究^{1)~4)}がある。田澤による論考には、吉見静江の言説についての考察もみられ、調査内容も精緻であり、本稿でも引用文献として参照している。また、瀬川による一連の著作^{5)~6)}があるが、瀬川も吉見の回想を所々に記している。筆者等も先述したように興望館について⁷⁾、また吉見が晩年に設立した茅ヶ崎学園について考察をおこなう中で⁸⁾、吉見の回想に触れている。しかしながら、現在のところ、吉見と日本女子大学等に焦点を当てた論考、及びその言説に焦点をあてた論考はみられない。

3. 戦前の吉見静江の歩みとその言説の源泉

吉見静江の言説がかたちづかれるその源泉には、大きく以下の三点があげられると推察できる。

- ① 日本女子大学における学び及びその後の女子大関係者とのつながり
- ② ニューヨーク社会事業学校(ニューヨーク・スクール・オブ・ソーシャルワーク、後のコロンビア大学社会福祉学科)における研鑽
- ③ 興望館における実践、社会的活動、宣教師からの学び

以上の経験と研鑽により、吉見の言説は、戦後大きく花開くことになる。吉見の著作等はそのほとんどが終戦後に発表されている。本稿では、上記の三点についてみていく。

3-1. 日本女子大学における学び

3-1-1. 成瀬仁蔵の影響

吉見静江は先述したように1915年に日本女子大学校附属高等女学校を卒業し、1919年に日本女子大学を卒業している。吉見在学中、成瀬仁蔵が校長であったこと、吉見の人生を顧みると、少なからず成瀬や日本女子大学の影響を受けていると思われることから、はじめに、成瀬仁蔵および日本女子大学の社会事業や保育所に関連する事項について、その概要をみていく。

日本女子大学の創立者・成瀬仁蔵は、若い頃キリスト教と出会い、大阪の浪花教会で受洗する。このキリスト教との出会いは、儒教的な人間観、ひいては女性を劣った者としてしか見られなかった人間観から、神の前の人間の平等への飛躍でもあったといわれる。「聖書を持つ青年」といわれた成瀬は、梅花女学校(現在の梅花女子大学)の主任教師となる。次いで大和郡山教会、新潟教会の牧師として、伝道活動を行うが、布教のため新潟に赴任した際、後に二代目校長となる麻生正蔵と出会い、意気投合する。その後、成瀬は渡米し、アンドーバー神学校、クラーク大学に学び、女子教育の研究を行う。同時に教育機関、社会事業施設などで調査研究を行い、

1894（明治27）年1月に帰国した。

帰国後、梅花女学校の校長に就き、麻生と共に本格的な女子高等教育機関の設立を構想。これを意図して、1896年2月『女子教育』を出版する。そこには「第一に女子を人として教育すること、第二に女子を婦人として教育すること、第三に女子を国民として教育すること」との女子教育の方針が示されている。

この著作が山林王・土倉ひいては実家が三井家である実業家・広岡浅子を動かすことになる。広岡浅子の支援は、金銭の寄付のみならず政財界の有力者への働きかけにまで及び、日本女子大学校は1901年に開学する⁹⁾。

精力的に活動をつづけていた成瀬だが、1918年秋、内臓に違和を感じ、翌年1月より病の床につく。肝臓癌であることが明らかとなり、死を予知した成瀬は、1919年1月29日、豊明講堂にて、「我が後継者に告ぐ」という告別講演をおこなう。担架で病院から女子大の講堂に運ばれ、自分の死亡後の大学運営について後顧の憂いはないことを学生たちに話した。1時間20分にわたり、病気の経過、死に直面しての心境—有限の肉体から無限の生命に入るとの死生観を述べ、今後の学校経営について語るが、この別れの講演は人々の記憶に永く残るところとなった⁹⁾。1919年卒業の吉見静江は、必ずやこの告別講演に出席していたであろう。成瀬の告別講演は、社会改良に役立つ教育をめざした成瀬の遺志とともに若い吉見の心に深く刻まれたに違いない。

成瀬仁蔵は、「自らの人格を高め、使命を見出して前進する」という理念のもと、評議員久保田譲にすすめられ、その教育理念を三原理にまとめる。教育三綱領として「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」を掲げ、1919年2月初旬、三綱領の揮毫をおこなっている⁹⁾。逝去のわずか一か月前のことだった。

3—1—2. 日本女子大学と社会事業

成瀬仁蔵の教育を受けた井上秀（家政一回生、後に日本女子大出身初の第4代校長となる。）は、米国に留学（1908～1910年）した際、米国女子大学の隣保事業（ハルハウス）に感銘し、まずは大学ではなく同窓会組織である桜楓会の仕事として、桜楓会託児所を設置することに努める。1912年、桜楓会託児所主任に推薦された丸山千代（教育二部六回生）は、1913年、桜楓会託児所を小石川区に開園。

日本で最初のモンテッソーリ方式による保育所として創立当初から注目された。それは、成瀬仁蔵の大学拡張運動にもとづく指導や、二代目校長・麻生正蔵の熱心なモンテッソーリ教育の紹介、学外から成瀬を助けた留岡幸助、生江孝之、英文学科教授で寮監であったミス・フィリップスの慈善活動を通じての影響などによるものであったといわれる¹⁰⁾。

また、「日本社会事業の父」と称された前出の生江孝之は、1918年日本女子大学の教授となるが、同年、日本女子大学に社会事業講座が開設される。

1918年の米騒動などにより、社会事業に対する意識が高まり、内務省もこれをうけて防貧事業として国民の生活改良に関与する方向に舵を切るが、社会事業の専門的な知識を有する人材育成が急務との認識が高まる。麻生は、同志社で同窓だった社会事業家の山室軍平、留岡幸助等とも相談し、1921年、我が国初の社会事業学部を開設する¹¹⁾。余談だが、後年、吉見静江のもとで働き、吉見静江の著作を著すことになる瀬川和雄は、山室軍平の下で地域福祉に携わった瀬川八十雄の子息である。神の導きとしか思えない縁である。

前述のように吉見が日本女子大を卒業するのは1919年である。吉見が学んだ英文学科には、前出のミス・フィリップス（1902～1941年に日本女子大学英文学科教授）が教鞭をとっていた。ミス・フィリップスは、社会事業についても深い関心を示し、『家庭週報 47号』では、英国女子大生の貧民救済事業について述べている。日本女子大学の社会事業学部創設前、英文学科出身者の中に社会福祉の先駆者として活躍した卒業生が多かったのは、ミス・フィリップスの影響があったのではないかとされている。吉見静江（英文16回生）もその一人だった。

英文12回生の浅賀ふさ（旧姓：小栗将江）は、13歳で日本女子大学付属高等女学校に入学した後、日本女子大学へ進学。戦前、渡米し、1924年にシモンズ大学・社会事業大学院に入学。その後、ハーバード大学教育大学院で幼児教育を一年間学ぶ。浅賀は、奇しくも吉見帰国と同じ年、1929年に帰国。聖ルカ病院に新たに開設された医療社会事業部に入職した。社会事業部は、次第に発展し、スタッフ10人を要する部署となり、1933年には作業治療部がつくられ、リハビリテーションやグループワークにも取り組む。日本で初めて欧米で発展した理念に

基づく医療社会事業は浅賀により導入されたといわれる。戦後、1947年、厚生省児童局嘱託として、GHQに対する渉外や、児童相談所の指導を行った¹²⁾。

浅賀と吉見は、同じ頃、厚生省児童局で働いていたことになる。

日本女子大学社会事業学部発足までの学部構成の中で、社会事業方面、社会教化改善運動などの仕事に進んだ卒業生のうち英文学科からは、吉見静江も含め以下の8名があげられている¹³⁾。

- ・ 押川美香—1 回生（家庭購買組合幹事、同会婦人会委員長、日本消費者組合婦人協会委員長）
- ・ 小林珠子—2 回生（大日本聯合母の会総務理事）
- ・ 横河英子—6 回生（子供のお里経営）
- ・ 安斉とみ子—10 回生（YWCA 会員教育部）
- ・ 小栗将江（後の浅賀ふさ）—12 回生（国際聖路加病院）
- ・ 吉見静江—16 回生（興望館セツルメント主事）
- ・ 宮田育—16 回生（東京市社会局福利課）
- ・ 益田国香—19 回生（大森区社会課）

また、日本女子大学付属高等女学校で吉見と同年であった及能綾子氏（同女学校 1915 年卒業）は、後に興望館理事、興望館館長（1947～1948）となるが、及能氏は白十字会の奉仕活動に従事したと瀬川は記している¹⁴⁾。後年、吉見が開設した茅ヶ崎学園の近くには白十字会の虚弱児施設があり、何らかの関係があったのではないか。今後の調査で明らかにしたい。

以上から、吉見は、社会事業への関心、およびモンテッソーリ教育についての基礎知識を、日本女子大学における学びからすでに何らかのかたちで理解していたものと推察できる。また、日本女子大学および日本女子大学付属高等女学校の卒業生の何名か（先述の及能綾子氏等）は卒業後も吉見と親交を深めていたことが確認されている。

付け加えていえば、吉見定年後、それを引き継ぐかたちで厚生省母子福祉課長となる植山つるは、吉見同様、日本女子大学を卒業し、聖路加病院勤務を経て東京市社会局などに勤務。戦後、厚生省に入り、児童局、社会局で働き、児童福祉法の制定などにかかわった¹⁵⁾。また、本稿でも参照した『社会事業に生きた女性たち』を著した五味百合子も、日本社会事業大学教授となるが、日本女子大学を卒業している。吉見静江と五味百合子は、1949年『社会事業』誌上で、同じ座談会に出席している。タイトル

は「女性・社会事業・結婚」であった。この分析は、後編に委ねることにする。

なお、1933年からのファシズム体制の下で戦争が拡大の一途をたどる社会背景から、昭和8年、社会事業学部は改組され、その名称を家政学部第三類に変更する。昭和に入り、左翼運動が弾圧され、軍事色が高まり、社会事業の名称が社会主義と混同され、誤解を受けるようになったためといわれる。この家政学部第三類からの学生の実習先として、興望館セツルメントがそのひとつにあげられている。期間は6カ月であった。「実習はとても勉強になりました。私は向島の興望館に行きました。英文科出身の吉見先生が館長で、よく学部の学生が実習に行っていました。そこでは託児所もあり母親の為には授産所もあり内職を教えておりました。実習はとてもよい体験だったと思います。」³⁷ 回生の回想である。

家政学部三類への移行後も、実習とならんで見学もおこなわれ、昭和19年5月まで続けられた。見学先のひとつに、興望館もあげられている。学生たちは、見学によって確かな知識を得、人と出会い。感動し、そして報告をまとめるという学習体験を、施設見学ノートにまとめている。1943(昭和18)年4月28日付の興望館の施設見学ノートも残されている。

1954(昭和29)年、日本女子大学教職員を正会員とし、社会福祉研究会が組織されるが、1956(昭和31)年に両会員を一丸とする在學生、卒業生の研究会となる。この会は社会福祉学に関する研究の促進助成をはかり、会員相互の協力、親和を目的としていた。1959(昭和34)年、社会福祉学総会で、パネルディスカッション「若い卒業生の職場を語る」がおこなわれ、吉見静江の講演も行われている¹⁶⁾。

余談だが、家政学部第三類は、その後、二度の科名変更を経て、1948年新制大学となると同時に、家政学部社会福祉学科となるが、1958年に文学部社会福祉学科となり、家政学士あらため社会学士が授与されることになる。

3-2. ニューヨーク社会事業学校における研鑽

吉見は、1927年から1929年にかけて、社会事業研究のため興望館セツルメントから北米合衆国に派遣されるかたちで、ニューヨーク社会事業学校（ニューヨーク・スクール・オブ・ソーシャルワー

ター、後のコロンビア大学社会福祉学科)で学ぶ。就学前の一人息子を残しての渡米であった。

渡米に際して、吉見は、「当時私はそのような専門については、何の教育も受けて居らず又日本で勉強するような学校もない時代でしたので、自信がありませんでしたが、外人部会の婦人方の決意と熱意の高いことを知って、日本人として私はこれをむげにことわることが出来ず、お引き受けしたのが出発点でした。」と語っている。

拙稿でも言及したように、ニューヨークのスクール・オブ・ソーシャルワークは、既に社会事業に従事した経験者が再訓練を受ける機関であり、研究内容の程度も高く、各大学からも沢山の研究生が来ており、吉見も一心に学ぶ傍ら、米国の進歩した社会施設をいろいろ見学したと、後年、山室軍平・息女の取材に答えている¹⁷⁾。

吉見静江とニューヨーク社会事業学校については、『吉見静江が1920年代の米国でみたセツルメントの理論と実践に関する史的考察』⁴⁾(田澤薫, 2021年)に詳しい。田澤の論考から、吉見静江在米時のニューヨーク社会事業学校の授業概要は以下のように要約される。

ニューヨーク社会事業学校では、教育と現場がともにソーシャルワークの理論と実践の学びの場であるという考えのもとに、修学期間の半分は社会福祉実践演習で費やされ、初年次の第三クォーター終了時までには、学生は「主たる社会福祉現場」を選択することになっていたという。

1927年にはカリキュラムの見直しが行われ、「ソーシャルワークの基本技術」「人としての経験による化学的要因定式」「ソーシャルワーク実践」「ソーシャルワーカーへの方向付け」の四つの理念に沿ってカリキュラムが組みなおされるとともに、ソーシャルワーク実践演習をさらに強化するための「フィールドワーク部」が設立され、実習先と学生を結び、支援する働きを担うようになった。

1929年10月には世界恐慌(大恐慌)が勃発するが、その直前、実践教育を軸とするソーシャルワークの学校が確立していく時期に、吉見はニューヨークで理論と実践に触れる学修環境のもと、勉学に励んでいたことになる。(田澤)

次に、吉見がその著作で「筆者がここに幾日か生活を共にした当時」と記していることから、吉見自ら実習をおこなったと推察されるニューヨークのグ

リニッジハウスについて、まずは、どのようなセツルメントであったのかみていく。

グリニッジハウスは、1902年の感謝祭の日に、マンハッタンのウェストビレッジのジョーンズストリート26番地の建物に、都市計画者でソーシャルワーカーのメアリー・K・シムホヴィッチによって設立されたセツルメントである。当時のグリニッジ・ビレッジは、イタリア人移民が増加し、通りは迷路のようであり、路地沿いの多くの家屋には上水道もなかった。乳児の死亡率は高く、教育も貧弱であり、初期のプログラムは、この生活条件を改善することを目指していた。

グリニッジハウスは1905年に移民の子供たちのための場所としてグリニッジハウス・ミュージックスクールを開設。続いて1909年にグリニッジハウス・ポタリー(陶芸)の前身であるハンドクラフトスクールを開設した。

1917年までに、ジョーンズストリートの建物では手狭になり、ガートルード・ヴァンダービルト・ホイットニーからの支援で、バロー・ストリート27番地にある現在の建物を建設する。ジム、ランニングトラック、劇場、屋上遊び場を備えた新しい建物は、グリニッジハウスの保育園や子供劇場プログラムなどの新しいプログラムのためのスペースとなった。

1916年に「こども福祉クリニック」がはじまり、1921年に保育園が開設される。吉見は、その6年後に渡米している。

グリニッジハウスはさらに多くのスペースを必要とするようになり、古い手工芸学校の建物は1928年にグリニッジハウス・ポタリー(陶芸)として再建され、陶器の国際的な中心地になる。メトロポリタン美術館は1939年に陶器2点を購入している。1942年、グリニッジハウスはニューヨーク市初の放課後プログラム、続いて高齢者センターを開設し、現在でもより多くのサービスを提供し続けている¹⁸⁾。

田澤の調査によれば、グリニッジハウスでは、その年度の事業計画は近所に住む人たちの関心事や要望で決まる。日常的に関わったり直接話したりする中での気付きから、新たな活動が事業に織り込まれたという⁴⁾。地域の要望を把握することから活動内容が決められていくという、セツルメントの基本姿勢が確認できる。

ここで、吉見は何を見聞したのだろうか。後年、吉見が著した文献²²⁾から、グリニッジハウスについてみていく。

吉見は、アメリカでは「文化教育的社会事業」が盛んにおこなわれ、それは我が国における画一的行政的なものではなく、教会、YMCA、YWCA、その他セツルメントなどを中心に、クラブ組織を通して、青少年指導、成人教育、レクリエーション、キャンプ指導、子供達の運動指導などの価値ある仕事をしているが、その多くは私設による経営であり、任意の奉仕であることが多いと説く。

さらに、グリニッジハウスを訪れた際の見聞について、以下のように記述している。(点線四角内は、筆者等要約。小文字は吉見による原文を一部現代語訳に改めている。)

○保育所について：子供達への栄養のある温かい食事の提供、子供達の教育的指導に重点をおき、家庭と密接な連絡を保ちつつ母親の教育にも留意している。

朝早く保育所の小さな子供達は、列を作って行儀よく、茶匙一杯の肝油をもらって飲み、それからお遊びの部屋に入っていく。栄養のある温かい食事が皆のために用意され、楽しくお晝を頂くのである。これ等のことはアメリカの大抵の託児所で行われている事であり、子供は勿論、母達から非常に喜ばれている事である。これ等の保育所は、子供達の教育的指導に重点を置き、あまり多くの子供を預かる事はしないが、コロンビア大学師範科の指導下にあつて、家庭と密接な連絡を保ちつつ、母の教育にも留意して子供の保育を行っているのである。

○クラブ組織について：付近には、趣味の豊かな彫刻、木工、陶器の指導をおこなう工作、音楽教育、その他学校の余暇を楽しく過ごすための色々なクラスやクラブや図書室がある。体育館では、スポーツの指導も行われている。日中は子供たちの為に、夜間は、青年や成人の為のクラブがあり、地区の楽しい生活の中心になっている。

このセツルメントは近辺にいくつかの工作所を有し、趣味の豊かな彫刻、木工、陶器の指導所に充てている。各工作所ではその道の先生が子供たちに熱心な指導を与え、弟子としての補導をおこなうのであるが、これらの工作室から優れた天分を認められて一人前の職人に仕立

てられる少年達もあり、非常に興味ある仕事で、特に陶器の工作室にお婆さんが首位の壺造りに没頭する事もあり、各自の特長ある作品によって催された展覧会は、なかなか芸術の香り豊かなものである。

又、音楽教育の為に、別の家があつて、学校から帰った子供達が、楽しんで集まって来るのであるが、非常に賑やかで、ヴァイオリンを習うもの、ピアノを練習するもの、其の他セロ、バンジョー等々、指導も非常に熱心なので、成績もなかなかよく、この楽団がコンクールで銀盃などを獲得した例も一再に止まらない。そしてこの学校で育ったトリオ等が、家庭の親睦はもとより、近隣の団樂の中心になる事は申すまでもない。

其の他子供たちの為に、毎日学校の余暇を楽しく過ごす事の出来る色々なクラスやクラブや図書室がある。子供達は各自の好みに応じて、演劇、歌、絵、裁縫、織物等のグループに入り、少年達は、体育館においてバスケットボール、ボクシング、バレーボール等の指導者を得て遊ぶ事が出来る。夜間は、青年や成人の為のクラブがあり、息子、娘、父も母も各々ここに知識の源と共に楽しみを見出し、計画や理想の実現の場所を見出すのである。又夏の夜長など、屋上にダンスパーティーを催したり、大人や子供の演劇グループの熱演があつたりする。又クラブメンバーの結婚披露や婚約披露のパーティーに使用される事もあり、全く楽しい生活の中心になっている。

○地区の健康増進について：妊婦の保健指導所、幼児の健康相談所などを開設。
青年女子の為に栄養のクラスを設け、家庭における年少者のための献立を研究、栄養ある食を年少者に与えて、健康状態の観察、調査を行う等、女子青年指導および家庭の栄養指導を行っている。

○キャンプについて：特に必要な子供の為に、気候の良い田舎を選び、健康増進、生活訓練の目的で、優れた指導者のもとキャンプ生活を営む。

その他の地区の健康増進については、妊婦の保健指導所、幼児の健康相談所などを開設しているが、単に来所する者の指導にあたるのみでなく、要求ある家庭と医者との間の連絡を密にして、その地区の健康習慣、訓練、懲罰、遊びその他神経質な子供の取扱い方について研究、討論などをする。

又青年女子の為に特に栄養のクラスを設け、家庭に

おける年少者のための献立研究の機会を作り、特にその栄養食を与えて健康状態の観察、調査を行う等、女子青年の指導をなすと同時に、家庭の栄養指導を兼ね行うなどはおもしろい保健指導の一例である。又特に必要な子供の為には気候の良い田舎を選び、健康増進、生活訓練の目的を持ち優れた指導者によって、キャンプ生活を営む事もある。

○問題のある子どもについて：特別指導を行うために、子どもの問題相談所を設け、学校の教師、病院、団体等の協力を得て、その原因を追究し、必要に応じて適当な処置を取る。

その他、近隣地区の所謂『問題の子供』についての特別指導を行うため、子どもの問題相談所を設けてある。これ等の特殊の子供達は、学校の先生、子どもの親、或いはセツルメント内の色々のクラスやグループの指導者によって紹介されて来るのであるが、それらの子供達の持つそれぞれの問題の解決の為には、相談所は、学校の先生、病院、団体等の協力を得て、その問題の原因を追究し、必要に応じては身体的の欠陥を癒す事、境遇の変化を計る等の適当なる処置を取るのである。家庭の悪い者の為にはフォスターホームを探して親しく之を指導し、子どもたちの成長をゆがめているものを取り除いて温かく彼等の育つ事の為に努力するのである。

○セツルメントは、様々なかたちで、家庭、社会の全般にわたって人々の生活に必要なものを見出し、互いに力を合わせ、助け合い成長する真に生きた隣保愛の実践例である。仕事に携わる人達は、職員、ボランティアあるいは外国の学生等、様々な人達が30人あまりいる。婦人は会館の中に、男子は近くの別館に泊まり、皆が一緒に賑やかな談笑の中で食事をとる。資金は、一般の人々からの任意の寄付による。

以上述べたように、セツルメントの働きは、実に様々な形に於いて、家庭、社会の全般にわたって人々の生活に必要なものを見出し、之を与え、近隣社会の欠陥を補い、過誤を是正して互いに力を合わせ、そのもてる善きものを分かち合い、持たざるものを受けて成長する真に生きた隣保愛の実践例である。

ここに例にとったグリニッジハウスの如きも私設のもので、一人の夫人と、之を扶ける家族の人々、友人達の二三十年にわたって注がれた、真にたゆまざる愛の努力と信念によって育てられ、次第に花咲き、実ってきたも

のに他ならない。嘗て筆者がここに幾日か生活を共にした当時、この仕事に携わっていた人達は、楽しい家庭の如く日常生活の苦楽を分かち合い、皆おのおの特技を以ってその持場々々に力を貸し働いていた。職員、ボランティア（任意の奉仕者）或いは筆者の如き外国の学生等いろいろの人達が三十余人、婦人は会館の中に、男子は近くの別館に泊まり、食事は皆が一緒に賑やかな談笑の中になされるのであった。各種の委員、教師その他のいろいろの役を持ってこの仕事を援けていた人達は、常時二百名近い数で、この様に多くの人々の優れた技術と誠意ある奉仕が、この使途とを斯くまでに可能ならしめているのである。又財的に之を支えている資金は、勿論、興味をもつ一般の人々により任意に寄付されるものである。

続けて吉見は、アメリカの社会事業ではケースワーカーの働きが必要とされており、社会事業のほとんどには網目のごとくケースワーカーが織り込まれている。例えば医師の診察を受けた患者の身体的病気のみならず、家庭的あるいは経済的に問題があればそれを取り除くことで、医療の治療も促進される等、医師の働きを助ける社会事業家をケースワーカーという、と説く。

以上、吉見の文献から、吉見がグリニッジハウスで何を見聞し、何を学んだのか、その概要をみてきた。吉見は、保育所では、栄養のある温かい食事が提供され、楽しくお昼をいただくのである、と記しているが、田澤の調査によれば、グリニッジハウスでは食事の際には、どの子どもも首からナブキンをかけて食卓につき、食卓にはテーブルクロスがかけられ、水の入ったガラスのコップが置かれ、小瓶には花が生けられてテーブルの中央に置かれていたという⁴⁾。そこには楽しい雰囲気があふれていると田澤は記している。さらに、クラブ組織についても同様に、クラブで培った子ども達の演奏が家庭や近隣の団樂の中心になっている、夜間には青年や成人のクラブもあり、夏には屋上でダンスパーティーが催されたり、時には結婚披露等のパーティーに使用されることもあり、楽しい生活の中心になっていると記しているが（原文中の下線部）、吉見はこのような生活文化に関わる視点にも着目している。

この著作では、グリニッジハウスにおける保育の給食、母親の教育、子どもたちのクラブ組織、青少年や大人のためのプログラム、青年女子の為の栄養

のクラス、献立研究などについて記述しているが、そのほとんどが、後述するように、後に吉見が主事として、館長として采配をふるうことになる興望館における様々な試みのペースになっていると考えられるのである。

3-3. 興望館における実践

次に、吉見の興望館における活動について、拙稿⁷⁾から引用要約するかたちでみていく。

かつて本所にあった興望館は関東大震災に罹災、1928(昭和3)年、寺島町へ移転する。1935(昭和10)年のこの地区の環境調査²⁰⁾によると、「地勢は低地で概ね平坦だが、甚だしく湿潤。下水道は常に汚水・濁水が停滞し、悪臭が鼻をつく。降雨時には汚水が溢れ不衛生なること言語に絶する。」(筆者要約)という状況であった。地区の人口は83003人、20307世帯。要保護人口・要保護世帯はその約15%だが、寺島町4丁目にあっては、4丁目の全人口の25.5%が要保護者であり、約24%が要保護世帯である。1歳から15歳の児童数についてみると、要保護世帯の児童が46.5%を占めていた。

興望館では、1929(昭和4)年9月に木造洋館一部二、三階建の本館が竣工する。寄付金の不足から、当初計画の二分の一に満たない延べ面積123坪に縮小するかたちで建設されたが、一階は事務室・社交室(応接室)・クラブ室・小使室・講堂(遊戯室)兼保育室。二階は全て職員の宿所で、食堂・浴室等の設備が配置され、三階は屋根裏で物置になっていた²¹⁾。全館スチームによる暖房設備で、ボイラー室が設置され、熱源は石炭であった。この本館について、戦前、興望館のセツラーであった瀬川和雄は非常に綺麗だったと語っているが、グリーン屋根にクリーム色の外壁で、当時としてはモダンな清楚な感じの建物であったといわれる。

丁度その頃、矯風会から社会事業を学ぶべくアメリカに派遣されていた吉見静江が帰国する。吉見は、これ以降終戦直後まで興望館の主任(後に理事)として大きな足跡をのこすことになる。

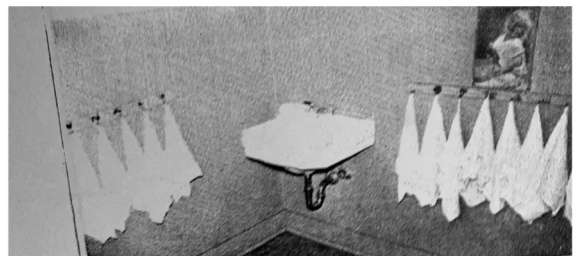
園児の生活指導という側面をみても、園児の生活を総合的に見据えた上で、さまざまな事業に取り組んでいたことがわかる。興望館に残されている戦前の写真からも、保育室の室内等は生け花などで美しく整えられ、生活文化に係る視点が配慮されていたこと、その中で子ども達に整理整頓などの生活指導

がおこなわれていたことが確認できる。吉見が戦後著した文献(『保育所の生活指導』赤城書房、昭和29年)の口絵を飾る写真(Fig.1, Fig.2 瀬川和雄は、この写真は興望館の保育室だと断言していた。)をみた途端、これはモンテッソーリではないかと筆者等は感じたのだが、おそらくは、桜楓会託児所のモンテッソーリ教育、あるいはアメリカで見聞したモンテッソーリ保育園の光景が吉見の意識の中にはあったであろう。



出典：吉見静江著『保育所の生活指導』赤城書房、昭和29年

Fig. 1 Interior of the nursery at the Kobokan



出典：吉見静江著『保育所の生活指導』赤城書房、昭和29年

Fig. 2 Nursery and washing area at the Kobokan

当時、欠食児童が社会問題となり、興望館では1931(昭和6)年より保育園の給食をはじめが、吉見は単に食事を与えるのみならず、食事の作法や偏食の矯正など食生活の躰の問題として、また幼児の栄養や衛生の問題について知識の無い母親教育の機会の場としてこれを捉えている。安いもの(捨ててしまうような人参の葉など)でも調理の仕方によってはおいしいおかずになることを母親に教えることからはじめなければならなかった、と吉見は瀬川に述懐したというが、父母の会における子どもの教育、栄養、衛生等の講話及び実習指導をはじめ、夕方子どもを迎えに来る親が当日の給食がどのよう

なものであったか見ることが出来るようにガラス箱の中に現物を陳列するなどの工夫をし、母親への教育の一助としている。吉見は、当時を振り返りながら、「ご飯に梅干し一つの弁当について母親と話をしていても、(母親に)なぜオカズが必要か、オカズを(母親が)どうして作ったら良いのか、その材料を買う費用をどうするのか、子どもの発育の為の栄養問題を考える以前に多くの解決すべき問題があった」と回想したことがあったと瀬川は記している²²⁾。

先述したように、当時の興望館の周辺一帯は非衛生な地域環境にあり、家庭の経済事情から狭い家屋での生活を強いられ、保育園には、皮膚病、眼疾等感染性疾患を患っている幼児が多数いた。寺島町4丁目に医療機関がほとんどなかったという当時の事情から、昭和3年から聖ルカ病院の救済部と共同して健康相談を実施した。その後、昭和11年9月には診療所の認可を受け、独自に常設の診療所を開設する²³⁾。

その他、吉見は着任早々から、青少年の娯楽および学習の指導(少年少女部)、母姉の手芸の組、人事相談、父母の会、裁縫の組等を開始する。父母の会では、日頃両親とも労働に従事し家庭の団欒のないことに配慮した親子遠足会、子どもの健康・保健衛生・生活習慣などについての父母と保育園職員との勉強、懇談の機会をもち、子どものオカズやおヤツの調理実習、保育園での昼寝用寝具の手入れ方法の講習などがおこなわれた。終日の労働で子どもの生活を顧みるいとまのなかった父母にとっては考えることも出来なかった世界を導入したのである、と瀬川は記している²³⁾。

少年少女部は、1929(昭和4)年の夏期キャンプより始められるが、1932(昭和7)年の事業報告によれば、貯金、音楽、ダンス、劇、童謡童話の組、読書等のクラブ、年齢別グループによる手工その他の共同制作の他、日曜学校がおこなわれている。このような配慮は、両親が働きに出て、日中放任されている子ども達のために、必要不可欠なものであった。駄菓子屋での買い食いや悪癖に耽る生活から子ども達を守り、健全に育成する為に、吉見は「子供郵便局」を設置して、小遣いを計画的に使用する習慣を学ばせている。その他児童図書館、児童遊園が設置された。また、夏期キャンプに先立ち、夏休み

子ども学校が開始されたが、これは夏期休暇のあいだも保育を必要とする子どものための特別行事であり、これ以降毎年継続して実施された。1933(昭和8)年には保育児童100名、尋常小学校・高等小学校の学齢児童254名が参加している²⁴⁾。

また、青年部は、1929(昭和4)年に発足している。吉見は、義務教育終了後すぐに工場や家事労働に従事する者が大多数の状況である青少年の指導に意欲をもっていたという。青年の自治活動として各種のプログラムが実施され、1937年頃には指導者も与えられ会員数も50名を超えるに至る。1940年に会員の手で発行された機関紙「若土」の1944年秋季号に吉見は一文を寄稿している。

1931(昭和6)年1月には授産部を開始し、仕事が無い婦人達へ、毛糸敷物、毛糸織物などの内職を与え、家計の助けとなるよう配慮された。

以上、吉見帰国後の興望館におけるプログラムをみてきたが、保育園児の給食、生活文化に関わる視点、母親教育、少年少女クラブ、青少年のプログラム等そのほとんどがグリニッジハウスにおける実践が参考になっているものと考えられるのである。

Table 1 に吉見静江の戦前の年譜を示す。興望館時代の吉見静江の社会的活動については、本稿の後編で、戦後の社会的活動と合わせてみていく。

4. その後

吉見静江は、終戦直後に当時の厚生省児童局・保育課初代課長となる。児童福祉法定時には児童福祉施設最低基準などに深く係わるとともに、戦災・引き揚げ孤児対策についても、孤児援護中央委員として尽力し、児童福祉事業の諸問題について責任ある任務を遂行した。1959(昭和34)年7月、厚生省(当時)を辞任するまでの12年間、厚生省で仕事を継続したが、先述したように、現在遺されている吉見の文献は、ほとんどがこの時期に著されたものである。これらの分析については、本稿の後編に委ねたい。

5. まとめ

本稿では、吉見静江の戦前の歩みを、吉見がかつて学んだ日本女子大学、ニューヨーク社会事業学校における研鑽、グリニッジハウスでの見聞、および

Table 1 Shizue Yoshimi's

N.Y.社会事業学校	グリニッジハウス	興望館	日本女子大学
			成瀬仁蔵、アメリカ留学から帰国
			成瀬仁蔵、「女子教育」を出版
ニューヨーク慈善組合協会、夏季セミナーを開く。その後、毎年授業を開設。			
			日本女子大学、開学。
	11月、グリニッジハウス設立		
	グリニッジハウス・ミュージックスクール開設		
	グリニッジハウス・ハンドクラフトスクール開設		
			桜楓会託児所、小石川区に開園。日本で最初のモンテッソーリ方式による保
	グリニッジハウス、こども福祉クリニック開設		
ニューヨーク社会事業学校と名称を改める。	グリニッジハウス、パローストリート27番地に建物を建設（現在の建物）		
			日本女子大学に社会事業講座開設される。
			1月29日、成瀬仁蔵告別講演、2月初旬、教育三綱領揮毫。3月4日逝去。3月9日告別式。
			本所区松倉町に約56坪の家屋を借り事業の拡大を図る。
			コンクリート造の新館を建設するが9月1日の震災で焼失
			区画整理により寺島町に移転。
	グリニッジハウス、保育園開設		日本女子大学に社会事業学部開設
ニューヨーク社会事業学校、カリキュラムの全面的な見直し。吉見静江入学。			
	この頃、吉見静江、グリニッジハウス見学、実習		
			区画整理により寺島町に移転。寺島町に土地を購入。
			興望館、本館竣工。吉見静江、帰国。興望館館長になる。
			興望館の保育園で給食をはじめ。
			社会事業学部は家政学部第三類に
			隣接に200坪の敷地・家屋を得、授産、診療、白米販売開始
			学童室整備。本館を増築し園舎を拡張。乳児室を新設。
			クラブ室、事務所を拡張、一部に児童図書館を開設
			母親、青年、児童の健康のため軽井沢町に沓掛学荘開設。
			外人部関東部会解散。献金により白米販売倉庫を改造。
			興望館は財団法人に認可される。
			吉見静江、興望館館長辞任

吉見静江－その言説を追うための研究ノート・その1

chronology before the War

終戦直後までの吉見静江年譜		
1894年		
1896年		
1897年	5月	東京府下日暮里で生まれる。父は山口荘吉、母はキャウの3人姉妹の二女。
1898年		
1900年		3歳のとき母が病没、銀行員の父は亡妻の妹夫婦に彼女を託す。吉見良三郎、テルの養女となる。
1901年		
1902年		
1905年		
1909年		
1913年		
1915年	4月	日本女子大学校附属高等女学校卒業
1916年		
1917年		
1918年		
1919年	4月	日本女子大学校英文科卒業
		富山県立女子師範学校附属高等女学校に奉職
		病気のため同校を辞職
1920年	4月	日本女子大学英語別科に奉職
	12月	家事の都合により同校を辞職
	1月	埼玉県立川越高等学校に奉職
1921年	7月	病気のため同校を辞職
	10月	松宮日語学校に奉職、宣教師たちとの出会う
1924年	12月	日本基督教会角苔教会にて松原栄一牧師より受洗
	7月	日語学校辞職
1927年	9月	興望館セツルメント社会事業研究のため北米合衆国に派遣、就学前の一人息子を残して渡米（1922年頃に祐氏誕生？）
		ニューヨーク・スクール・オブ・ソーシャルワークにおいて、二年間社会事業及び経営法を学ぶ
1928年		
1929年	9月	（茶色い革製の旅行カバンをもち）帰国。興望館館長に就任
1930年	5月	興望館理事に就任
1931年		
1932年	12月	隣保事業研究委員会委員に任命される。財団法人中央社会事業協会
1933年		
1935年		
1939年		
1940年	4月	方面委員（後に制度改正により民生委員）に任命される
1941年	4月	愛の家理事に就任
		司法保護委員に任命される
1942年	4月	社会法人母を護るの会監事に就任
	7月	満州国10周年記念社会事業大会に社会事業家民間功労者として厚生省より推挙され出席（7月2日～4日）
	7月	人事調停委員に任命される
1943年	12月	吉見静江、興望館理事に就任
1944年	5月	26日、静江は寺島伝道所へ転入会
1945年		
	4月	向島区防犯協会理事に任命される
	4月	全日本社会事業聯盟常務理事に就任
1946年	7月	日本基督教婦人矯風会会計理事に就任
		ララ救済物資中央委員会委員に任命。実行委員となる。（1952年6月まで）六大都市で保育所給食を実施。
	10月	東京都民生委員に任命される
		財団法人日本社会事業協会理事に就任
1947年	5月	孤児援護中央委員に任命
	6月	児童福祉に関する中央常設委員会委員に任命
	12月	児童福祉施設最低基準日本社会事業協会案作成第四部会委員に任命
	12月	興望館館長辞任、厚生省児童局保育課初代課長に就任

興望館における実践からみてきた。日本女子大学では吉見在学中に社会事業学科が開設されている。吉見は英文学科出身であるが、社会事業の大切さ、モンテッソーリ教育などを何らかのかたちで理解していたと推察できた。また、吉見の在学中は一貫して成瀬仁蔵が校長であったことを考えると、とりわけ成瀬仁蔵の告別講演、および教育三綱領は、若い吉見の心に深く刻まれたに違いないと思われた。留学先のニューヨーク社会事業学校および実習先のグリニッジハウスからは、その後の興望館における実践に結び付く様々な活動の知見を得ていたことが確認された。

また、戦前の年譜 (Table 1) からは、吉見が学んだ二つの大学や実習や実践で関りをもつ二つのセツルメントは、何れも吉見が幼少の頃設立され、それぞれの大学や施設は吉見の成長とともに、時代と共に歩んできた様子が読み取れた。

今後は、本研究の後編において、戦後に著された吉見静江の言説、および社会活動の分析により、吉見静江の児童福祉等についての論考を考察し、理解を深めていく予定である。

引用・参考文献

- 1) 田澤薫：興望館セツルメントにおける吉見静江、聖学院大学論叢、第31巻第1号 (2018)
- 2) 田澤薫：吉見静江館長時代の興望館セツルメントにおける「幼児の個別理解」、聖学院大学論叢、第30巻第2号 (2018-02)、31-43 発行年2018-02
- 3) 田澤薫：保育所制度の具体化と困難に関する史的考察－吉見静江保育課長の実践理念に照らして－、聖学院大学論叢、第32巻第1号、(2019)
- 4) 田澤薫：吉見静江が1920年代の米国でみたセツルメントの理論と実践に関する史的考察、聖学院大学論叢、第34巻第1号、(2021)
- 5) 瀬川和雄：(シリーズ福祉に生きる / 47)吉見静江、大空社 (2001)
- 6) 瀬川和雄：興望館セツルメントと吉見静江、社会福祉法人興望館 (2000)
- 7) 大高真紀子、定行まり子：興望館における建物及び活動の変遷過程に関する研究、建築学会計画系論文集 (2008)
- 8) 大高真紀子、定行まり子：虚弱児施設・茅ヶ崎学園に関する研究ノート、日本女子大学大学院紀要、家政学研究科・人間生活学研究科、第28号 (2022)
- 9) 日本女子大学 HP
- 10) 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会：日本女子大学社会福祉学科五十年史、日本女子大学社会福祉学科、40～41 (1981年)
- 11) 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会：日本女子大学社会福祉学科五十年史、日本女子大学社会福祉学科、63～70 (1981年)
- 12) 五味百合子編、阪上裕子：社会事業に生きた女性たち、ドメス出版、245～254 (1973 (昭和48)年)
- 13) 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会：日本女子大学社会福祉学科五十年史、日本女子大学社会福祉学科、46～48 (1981年)
- 14) 瀬川和雄：興望館セツルメントと吉見静江、社会福祉法人興望館 57～58 (2000)
- 15) 福祉新聞：福祉の学び舎5—日本女子大学、2022年2月8日
- 16) 日本女子大学社会福祉学科五十年史編纂委員会：日本女子大学社会福祉学科五十年史、日本女子大学社会福祉学科、341～342 (1981年)
- 17) 山室徳子：婦人之友 (昭和23年3月号)、(1948)
- 18) グリニッジハウス HP
- 19) コロンビア大学同窓会編、吉見静江他：これがアメリカ、ジープ社、205～212 (1950 (昭和25)年) この著書は、コロンビア大学同窓会が刊行したアメリカ研究叢書の中に吉見静江が寄稿した論文と内容は同じである。本稿では、「これがアメリカ」を参照している。
- 20) 東京市社会局：寺島市民館を中心とする環境調査、11～13、22～29 (1936)
- 21) 興望館創立75周年記念編集委員会：興望館セツルメント十五年の歴史、社会福祉法人興望館、27、40 (1995)
- 22) 瀬川和雄：興望館セツルメントと吉見静江、社会福祉法人興望館、91～93 (2000)
- 23) 瀬川和雄：興望館セツルメントと吉見静江、社会福祉法人興望館、84～86 (2000)
- 24) 瀬川和雄：興望館セツルメントと吉見静江、社会福祉法人興望館、104～129 (2000)